

あんなことは——できたらいい？

あんな夢やこんな夢は——いっぱいある？

みんなみんなみなかなえて——しまった

あの乙一が放つ不思議なポツケ

“の内側から広がる、どこまでも透きとおった世界！”

F

丘の上に建っているからだと思いが、私の部屋は風通しが良く、窓を開けておけば夏場など扇風機いらずだった。床に埃が落ちていても、ベランダの窓とその反対側にある出窓を開けておくだけで、室内を通り抜ける風が埃を持ち去ってくれた。お風呂上がりに窓辺へ立てば、風がびゅんと吹いて私の髪の毛は一瞬で乾いた。しかしいいことばかりというわけでもなく、それなりに問題は多かった。

窓辺に風鈴を垂らしておけば、絶えず鳴り響いて近所迷惑だった。強い風が吹いた日など、風がまともに部屋の窓へぶつかってきて窓ガラスが割れるのではないかと心配した。風が過ぎ去った後は、飛ばされてきた大量の木の葉がベランダに引っかかっていた。

引っかかっているのは木の葉だけではなかった。それらに混じって、だれのものかわからない泥だらけの上着や靴下やスカートなども、ベランダに落ちていたり窓にぶら下がったりしていた。私の部屋のベランダは漁業に用いる網のようだった。漁船が網で大量の小魚を捕獲するように、格子状のベランダは風で飛ばされてくる様々なものを回収した。朝

にカーテンを開けると、男物のトランクスが目の前にぶら下がっているのは女子高生の生活する場として大いなる問題だった。

飛ばされてきた衣類は捨てるのも惜しいので洗濯しなおした。アイロンをかけた後、男物の衣類はすべて父にあげた。拾いものだとは知らず父は喜んで他人のトランクスを穿いた。飛ばされてきたものの中にはブランド物もいくつもあり、母にプレゼントしてもやはり喜ばれた。拾い集めた服だけで身だしなみを整えて外を歩いたこともあった。私の着ている服が風で飛ばされてきたものだと気づいた人間はいなかった。

冬を間近に控えた十一月六日夜。まだ幼稚園にも通っていない小さい弟が私と一緒に眠りたいと主張した。

ベッドの中で、隣に眠る弟の頭をなでながら、窓が風で震える音を聞いた。夜が深まるとともに風の強さは増していき、外から聞こえてくる唸りは大きくなっていった。

翌朝に目が覚めると、弟を起こさないうち静かにベッドから出た。ベランダに立つと、丘の下にある町並みが眼下に広がった。昨晩の風が嘘のような快晴だったが、ベランダにはいつものように木の葉が厚く降り積もっていた。

私は木の葉の中に妙なものを見つけてあくびを止めた。それは黄色の物体で、一辺が二十センチほどのTの字形をしていた。木の葉の中から拾い上げてよく見ると、Tの字の横棒はプロペラになっていた。縦棒の先には半球状のものがついており、電気スタンドのよ

うに立てて置くことができた。

一見すると竹とんぼに似ていたが、有名な漫画に出てくるタケコプターという道具のほうを私は真っ先に想像した。その漫画は、未来から来たとてもネコには見えないネコ型ロボットが、さえない主人公の少年を様々な道具で手助けするというものだった。タケコプターという代物は、ネコ型ロボットが空を飛ぶときに使用する道具として有名だった。

金属なのかプラスチックなのかわからない手触りと重さだった。最近はこの玩具が売られているのかと思いつながら室内に戻った。それにしても今日は変なものがベランダにかかったものだなと思つた。

その時点ではまだ、屋根の縁に引つかかっている白い布きれの存在に私は気づいていなかった。もしも気づく前にそれがどこかへ飛んでいって落ちていたなら、井上京子が町を恐怖のどん底に突き落とすこともなかったはずだ。



十一月七日金曜日。

学級委員という立場のため、学校が終わると担任塚本に呼び出されて雑務を命じられた。男子の学級委員である倉木氏とともに処理をした後、私は高校を後にした。学校から

自宅までは歩いて十五分程度だった。家に戻って母と弟にただいまを言うと、部屋に置きっぱなしだったタケコプターの玩具をショルダーバッグに詰めて私は再び外へ出た。

「今朝、かくかくしかじかでベランダにタケコプターの玩具が落ちていたんだよ」

昼休みに教室でそう話をする、漫画好きの井上京子は「見たいです、それ」と勢い込んで言った。

「松田さん、それ、学校に持ってきてないんですか？」

「学校が終わったら家まで取りに戻るよ。おまえはいつもの廃ビルで待っている」

「親切ですね」

「『ガラスの仮面』を貸してもらった恩があるからな」

商店街の片隅にある廃ビルへ到着したのは十六時ちょうどだった。そのビルは果物屋と玩具屋の間に建っている三階建ての古い建物だった。駅前にできた大手デパートのせいで商店街の客足が減り、数年前に中の店舗はすべて消滅した。今では中身のない外壁だけが残っており、夕日を受けて赤く染まっていた。

私は人に見られないよう廃ビルの入り口を抜けて中に侵入した。一階には裸のマネキンが、二階には空の棚が、三階には事務機が放置されていた。井上京子はいつもの通り三階の日当たりがいい窓辺で椅子に腰掛けていた。野暮ったい眼鏡で顔はわからないが、制服の胸元にたれている涎よだれから、また居眠りしているのだらうと察せられた。